

# 与謝野町織物人材育成講座+企業訪問

## ～自身のデザインを織物にしてみませんか？～

### 概要

#### ■本町紹介

平成18年3月1日、旧3町(岩滝町、野田川町、加悦町)が合併し「与謝野町」が誕生しました。

与謝野町は、京都府北部、日本海に面した丹後半島の南部に位置し、南は福知山市、東は宮津市、西は京丹後市、兵庫県豊岡市に接しています。総面積108.38km<sup>2</sup>の範囲に約2万人が暮らしています。町域全体が大江山連邦(山)をはじめとする山並みに抱かれ、町の中央を流れる野田川流域(川)には平野(扇状地)が広がり、天橋立を望む阿蘇海(海)へと続いています。

京都市からは北西へ約80kmに位置し、京都縦貫自動車道が全線開通しており、道路交通の利便性が向上しています。大阪からのアクセスも良好です。

また、基幹産業である「丹後ちりめんを主力とした織物業」は、人口1,000人あたりの織物事業所数が20.2事業所と全国1位であり、令和2年には丹後ちりめん創業300年を迎えました。

昭和初期の織物工場や機屋の家並みが今も残る「丹後ちりめん」の国内随一の生産地であり、明治から昭和には、丹後と京都を結ぶ物流拠点としても栄えました。なだらかな坂道が曲線を描く街道筋には、今も機音が聞こえる明治時代の織物工場や、ちりめんが育んだ懐かしさを感じる木造・土壁の町家など、明治・大正・昭和の各時代の建造物が立ち並んでいます。まるで屋根のない建築博物館のような「ちりめん街道」と呼ばれる町並みが大切に守られています。

#### ■実習先施設概要

本町が管理運営する「与謝野町織物技能訓練センター(京都府与謝郡与謝野町字四辻515番地1)」では、織物業の担い手の養成及び育成を行うと同時に関係人口及び交流人口を拡大し、織物業の振興を図ることを目的に設置しています。

町職員として技術指導者を2名配置し、織物技術の集積する拠点施設(織物技術を学べるマンツーマンで習得できる京都府内唯一の施設)として織物業の担い手育成において織物技術指導を行い織物技術の伝承を図っています。

#### ■講座内容 ※詳細は下記「具体的な実習内容」のとおり

今回の内容としては、「織物人材育成講座+企業訪問」と称し、町内外問わず織物業の普及促進やデザインを通じての関係人口、交流人口に繋げると同時に、実習先で働く技術指導者のように技術者(行政職員)として様々な業務があること、インテリアや和装洋装の生地をつくる生産者との交流を通じて今後のキャリアへ繋がる機会へ繋げてもらうために「自身のデザインを織物にする講座+企業訪問」として実施します。

織物(丹後ちりめん)の工程を学ぶ座学から製織(実際に織機を使う)を行う実践を行います。また、与謝野町内の機屋見学を行い、事業者との交流を通じて織物業(丹後ちりめん)の実態や魅力を感じてもらう機会を創出します。

## ■実習期間

- (1)受入期間:令和8年4月1日(水)~令和9年3月31日(水)  
※相談の上、いつでも受入可能です。
- (2)実習日数:5日間(連日でなくてもOK)
- (3)実習時間:9時00分~16時00分(休憩60分)
- (4)総実習時間:約30時間
- (5)費用(受講料及び使用料):5,000円(受講料)+100円~200円/h(織機使用料)
- (6)その他:宿泊施設の紹介等、必要な方についてはご相談ください。

## ■受入条件

- (1)受入可能人数:2名/日 ※可能な限り対応します。
- (2)対象者:指定なし  
※学生の方については、インターンシップ型がありますのでご相談ください。  
※織物業に従事したい方については、様々な織物人材育成講座も備えておりますのでご相談ください。
- (3)服装規律:特になし

## ■実習方法・内容

- (1)実習方法:対面のみ
- (2)主な実習内容:実際に実務を担当、企業訪問
- (3)具体的な実習内容

DAY	項目	内容
DAY1	オリエンテーション、座学、実技	(座学)織物の原理や織物機械の仕組み等の基本構造を学ぶ (実技)自作のデザイン(デジタルデータ)の加工
DAY2	実技、企業訪問	(実技)織物に落とし込むデータ入力作業 (企業訪問)町内織物事業者へ見学
DAY3	実技	(実技)織物に落とし込むデータ入力作業
DAY4	実技	(実技)実際に織機を使って作品づくり
DAY5	実技、振り返り	(実技)実際に織機を使って作品づくり (振り返り)5日間の振り返り

※DAY1(実技)については、既に自身のデザインをお持ちの方に限ります。

デザインをお持ちでない方については、実技として「デザインの作成」が追加で工程に含まれます。

## 丹後ちりめんの歴史

### ～丹後の絹織物の始まり～

京都府北部の丹後の地では、どこからともなく「ガチャガチャ」という機織りの音が聞こえてきます。丹後は特に秋から冬は「弁当忘れても傘忘れるな」と言われるほど、雨や雪の日が多い湿潤な気候で、乾燥すると糸が切れてしまう絹織物の生産に適していました。奈良時代には聖武天皇に絹織物「緇(あしぎぬ)」を献上し、南北朝時代のものとされる「庭訓往来」では絹織物「丹後精好」が記されるなど、古くから織物の里でありました。

### ～丹後ちりめんの誕生～

丹後の内陸部では、農業と織物が人々の生活を支えてきましたが、江戸時代に京都西陣で絹織物「お召ちりめん」が開発されると、絹織物「丹後精好」が売れず、農業も凶作が続き、人々は危機に直面しました。ちりめんは、生地に「シボ」と呼ばれる細かい凸凹がある美しい光沢を持つ織物で、当時その技術は門外不出とされていました。そうした中、数名の先人たちが縮緬を生む技術を京都西陣で学び、丹後に帰ってその技術を導入しました。これをきっかけに丹後ちりめんのシボを出すための一番重要な要素である「強撚糸」を織る技術が形になり、享保5年(1720年)、厚手で強いシボが出る、それまでどこにも無かった風合いを持つ唯一無二の絹織物が誕生しました。

### ～丹後ちりめんが育んだ町並みと文化～

その後、「丹後ちりめん」は、ちりめんの代表的存在として「シボ」があることで、しなやかな風合いで、発色性に富むことから、友禅染めなどによって美しく彩られる着物の生地として定着し、我が国の和装文化を支えてきました。人々は生地に多彩な模様を施す紋ちりめんの開発や、産地での精錬(湯で煮て、絹糸を覆っているタンパク質(セリシン)を取り除く工程)・検査制度の確立などの品質向上の努力を続けました。昭和30～40年代には、「ガチャ」っと織れば万単位儲かる「ガチャマン」と呼ばれた最盛期を迎えるなど、丹後は絹織物の一大産地として発展し、周辺地域でも養蚕や製糸業を振興するなど、府北部全体の発展に大きく貢献しました。

「丹後ちりめん」は、この地の代表的な基幹産業として、人々の生活を支えるとともに、地域の歴史や文化に深く浸透し、町並みや賑わいを育んでいます。往時の繁栄ぶりが伝統芸能や生活文化に今も息づいています。

～丹後ちりめん 300 年の歴史～

令和 2 年(2020 年)、「丹後ちりめん」は創業 300 年を迎えました。丹後ちりめんの特徴である「シボ」と呼ばれる生地の表面の凹凸は、光を受けると生地に光と影の独特な表情を浮かび上がらせませす。それは、長い年月受け継がれてきた技術が織りなす、丹後地域の歴史と文化のひとつの形と言えます。

その技術は受け継がれ、現在では丹後地域は日本全国で 7 割を占める絹織物産地として知られています。現代においては、着物需要が減る傾向にありながら、着物文化の振興とともに、白生地の洋服への応用など新しい「丹後ちりめん」の形、世界への発信、若い世代への文化継承に地域一丸となり取り組んでいます。

平成 29 年(2017 年)には、与謝野町を含む、丹後地域(2 市 2 町)の「300 年を紡ぐ絹が織り成す丹後ちりめん回廊」が文化庁より「日本遺産」の認定を受けました。

～織物事業者たち～

与謝野町の織物事業者の中には、色柄や形といった表面的なデザインではなく、素材の選定から吟味し、そのテキスタイルをイメージして形にする手法で、オリジナルの手織り機を一から手作りするなど、伝統的な手織技法を駆使したオールハンドメイドのネクタイやストールの商品を海外展開している事業者や、近年では丹後で生産された生地が「パリコレクション」に採用されるなど海外からの評価も高く、「丹後テキスタイル」が世界から注目されています。

また、和装離れが進む中で、現代のニーズに寄り添ったインテリアなどのカーテンや電車・車のシート、洋装などの生地を生産している事業者も増えてきている状況です。

加えて、府内の民間企業が次世代型養蚕業の拠点を町内へ整備する計画もあり、新たな風が与謝野に吹き込まれています。

<問合せ先>

与謝野町役場 産業観光課

TEL:0772-43-9012

FAX:0772-46-2851